

20○江 ……川口久雄氏は大系本の頭注で「江は、川に限らず瀬戸内海の港津をもう」と説明され、更に大系本の補注で「以上二句（十九・二十句）、悲痛をきわめた謫行の旅路、水陸の情景。フラッシュバックの手法でうつつしだした二つのショット文。『政事要略』卷二十二、年中行事八月上、北野天神会条所引昌泰四年正月二十七日太政官符に領送使善友益友に対して発遣を命じ、「山城摂津等国、天給食馬。路次国又宜准此」と指令している。したがって、太宰府に西下する途中では、陸駅では蹄の破損した馬もとりかえられず、江津では、艫のこわれたぼろ船にのせられたのである」  
（補注（十二）730頁）と詳しい言及がなされている。

21○郵亭……郵は伝書の舎。文書を伝送して止る處をいう。即ち宿駅。

『漢書』「薛宣傳」に「過其縣、橋梁郵亭不修（注）郵、行書之舎、亦如今之驛及行道館舎也」の用例が、又、『漢舊儀』下に「十里一亭、五里一郵。」の用例が見える。『白氏文集』「送劉谷詩」に「郵亭已送征車發、山館誰將候火迎」の句が、又、「棣華驛見楊八題夢兄弟詩」に「遙聞旅宿夢兄弟、應爲郵亭名棣華」の句が見える。『漢語大詞典』には「驛館、通送文書者投止之處。」と説明し、元稹の「酬樂天東南行詩一百韻」の「郵亭一蕭索、烽候各崎嶇」の句を載せる。『凌雲集』「63奉和春日遊獵日暮宿江頭亭子 御製」に「君王獵罷日云暮 江上郵亭駐綵輿」の句が見える。

▼この一句では、京都から五十の駅亭があったことを指す。既に、先学の指摘があるように駅伝の制については『延喜式』に記載がある。

22○程里……里程のこと。みちのり。道程。路程。道里。